

平安文学論究会編

講座
平安文学論究
第三輯

風
間
書
房

昭和61年7月20日 印刷
昭和61年7月31日 発行

講座 平安文学論究 第三輯

定価 八、〇〇〇円

編者 平安文学論究会

発行者 風間 務

印刷者 中内 康 児

発行所

株式会社
風間書房

101 東京都千代田区神田神保町一の三四
電話〇三(二九一)五七二九番
振替東京一八一八五三番

(有朋製本)

ISBN4-7599-0657-6

講座 平安文学論究 第三輯 目次

金葉集の評価……………	滝澤 貞夫……………	一
撰集資料としての勅撰集歌——『明題和歌全集』収載の金葉歌の場合——……………	三村 晃功……………	三
勅撰和歌集詞書研究序説——千載和歌集を中心として——……………	後藤 重郎……………	三
千載和歌集の考察——歌材「夢」の視点から——……………	糸賀きみ江……………	七
歌仙落書考——千載集時代秀歌撰研究統紹——……………	松野 陽一……………	一五
院政期の女流歌人——特に待賢門院堀河とその家集——……………	森本 元子……………	一六
大嘗会和歌と六条家……………	井上 宗雄……………	一九
藤原顥輔の和歌——『久安百首』の作品について——……………	安田 純生……………	二三
藤原成範年譜考……………	青木 賢豪……………	二六
金葉集・詞花集・千載集研究文献目録……………	佐藤 明浩……………	三〇七

金葉集の評価

滝澤 貞夫

一

これ迄『金葉集』の特質を論じ、一つの勅撰集として評価しようとする時は、きまつて二度本『金葉集』を対象とするのが常であった。松田武夫氏が「理窟からすれば、三奏本をもって『金葉集』の代表的本文とすべきであるが、成立当初から『金葉集』の本文として二度本が世間に流布して今日に至ったので、二度本中の精撰本をもって、『金葉集』を代表させてよいようである。その上、二度本の内容が、初度・三奏両本に比べて新しく当世風で、俊頼の考へが、比較的自由に編集面にあらわれているからである。」（『平安朝文学史』明治書院・40年10月）と言われたように、これは撰集過程の特殊な事情から、二度本が長く流布本の地位を占めてきたことによる。その上、和歌史の流れを展望しようとする場合、一見都合のよい特徴や内容をこの二度本が最も豊かに備えているように見えるためでもある。

ところでこの従来の常識を一旦払拭し、改めて初度本・二度本・三奏本をそれぞれ別個の独立した撰集として見較べるとどういうことになるのであろうか。夙に西下経一先生は『和歌史論』（至文堂・19年11月）で「初度本は巻五までしか伝はらぬので、巻一から巻五に至る各巻の出入を計算すると左の如くである。即ち初度本と二度本との関係は、

初度本の四七一首から一六二首を削り、その補ひは四五首に止めて三五四首としたのが二度本であるから、二度本は歌の出入によって面目を改めると共に、集の大きさを七割五分の程度に縮めてゐるわけである。二度本と三奏本との関係は二度本の三五四首から一一四首を削り九五首を補ったのが三奏本である。初度本と三奏本との関係は初度本の四七一首の内二五五首を残し、他から八五首を補ったのが三奏本である。初度本・二度本・三奏本に通ずる関係は、二二四首は終始動かないといふことになる。」と三本間の激しい歌の出入れを具体的に指摘しておられる。この歌の出入れはとも一つ勅撰集の特質や評価を論じ得る範疇に収まるものとはいえないであらう。勿論これは他の多くの勅撰集が撰集過程で見せる差し替えの範囲をはるかに越えた振幅を示している。そこで三集の関係は、丁度『古今集』に対する『新撰和歌集』、『拾遺抄』に対する『拾遺集』、三奏本『金葉集』に対する『詞花集』、『統詞花集』『月詣集』に対する『千載集』の関係に匹敵すると言つてもそれ程過言だとは言えないのではなからうか。

そこで、小稿は一つの試みとして、『金葉集』の初度本・二度本・三奏本をそれぞれ別個の独立した勅撰集と見なし、この三本の間に見出せる差異を諸先学の業績に導かれながら出来る限り具体的に検討してみたい。同一の下命者同一の単独の撰者による三本に共通して見出せる現象を把握、三本それぞれの特徴とそれが持つ意義を考え、併せて三本の変貌が示す意味などの考察を試みたい。なお使用する本文は、初奏本が静嘉堂文庫所蔵伝冷泉為相筆本（33年複製本）、二度本はノートルダム清心女子大学所蔵伝橋本公夏筆本（ノートルダム清心女子大学古典叢書）、三奏本は平瀬陸氏所蔵伝後京極摂政良経筆本（但し、増田繁夫氏他の『金葉和歌集総索引本文・索引』による）である。

『金葉集』の三集に共通する特徴としてまず目に付くのは、同一作者の歌の隣接する場合が極めて珍しいことである。同一作者の歌が隣合っているのは、三奏本（以下三と略記する）二四九・二五〇藤原伊家、初度本（以下初）二五八・二五九大納言経信↓他資料によると別人、（三）二六四・二六五大江嘉言、（三）二九五・二九六藤原長能、（初）四三五・四三六（三）三六〇・三六一橘則光、（初）四五八・四五九（二度本（以下二）、四〇〇・四〇一（三）三二二・三二三藤原敦光、（二）七三四・七三五（三）六二八・六二九權僧正永縁、（二）七四三・七四四（三）六三六・六三七田口重如があるに過ぎない。更に読人不知歌でも、（二）五六四・五六七（三）四六九・四七一、（二）五七九・五九六（三）四八九・五〇三、（二）七五八・七五九が隣接しているに過ぎない。つまり初度本で同一作者歌が隣合っているのは三個所、二度本も三個所（読人不知歌も二個所だけ）、三奏本で七個所（読人不知歌二個所）あるに過ぎない。しかも経信の例は、別人の歌を『金葉集』が誤って共に経信歌とした可能性が大で、他の場合も現存資料からではどれも果して同一作者歌であるか否かが証明出来ないものばかりである。或いはこれも『金葉集』で作者名を欠いた為、誤って同一作者歌となった可能性が感じられるものである。俊頼は、他の多くの勅撰集が同一作者歌を何首か列ねているのに対し、『金葉集』で全く特異な撰集方針を貫いているといえよう。

ところが逆に、撰集資料になったと思われる出典の同一歌は二首三首と並んで『金葉集』に何個所も見出される。該当箇所は次に列举する通りかなりな数となる。

〔初度本〕 五首連接 白河花見御幸1個所 二首隣接 天徳四年内裏歌合3・嘉保元年前関白師実歌合3・堀

河百首3・堀河院御時花山花見2・寛和元年内裏歌合1・寛和二年内裏歌合1・承暦二年内裏歌合1・寛治三年太皇太后宮寛子扇歌合1・嘉保二年郁芳門院媞子内親王前裁合1・長治元年左近衛権中将俊忠歌合1・永久四年参議実行歌合1・摂政左大臣家郭公歌十首1・摂政左大臣家歌合1・寛治八年八月十五夜鳥羽殿歌会1・能宣集1・大納言経信卿集1・六条修理大夫集1・(散木奇歌集1)

〔二度本〕 五首連接 白河花見御幸1 四首連接 堀河百首1 三首連接 嘉保元年前関白師実歌合1・永

久四年参議実行歌合1・堀河百首1 二首隣接 堀河百首7・嘉保元年前関白師実歌合3・(散木奇歌集3)・寛

治三年太皇太后宮寛子扇歌合2・堀河院御時花山花見2・承暦二年内裏歌合1・寛治五年従二位親子草子合1・嘉保二年郁芳門院媞子内親王前裁合1・康和四年内裏艶書歌合1・長治元年左近衛権中将俊忠歌合1・永久四年白河院鳥羽殿北面歌合3・永久四年参議実行歌合1・寛治八年八月十五夜鳥羽殿歌会1・入道右大臣集1・一宮紀伊集1・帥中納言俊忠集1・六条修理大夫集1・基俊集1

〔三奏本〕 四首連接 玄々集1・白河花見御幸1 三首連接 玄々集3・永久四年参議実行歌合1 二首隣

接 玄々集11・天徳四年内裏歌合3・寛和二年内裏歌合1・承暦二年内裏歌合1・寛治三年太皇太后宮寛子扇歌合1・寛治五年従二位親子草子合1・嘉保元年前関白師実歌合1・嘉保二年郁芳門院媞子内親王前裁合1・康和四年内裏艶書歌合1・永久四年参議実行歌合1・長能集1・入道右大臣集1・一宮紀伊集1・帥中納言俊忠集1・六条修理大夫集1・基俊集1・(散木奇歌集1)

この外直接隣接しないまでも、一、二首隔てて同一の出典を持つ歌が近接している場合も数多い。このように同一作者の歌が隣合つて並ぶことが減多になく、逆に同一出典の歌が数多く隣接しているこの現象は、三集のいずれにおい

ても、撰者源俊頼は、歌人本位に歌を選ぶようなことをせず、隣接の歌同志が醸し出す配列美・余情にも心配るより、集めた撰集資料をそのまま主題の順序に沿って配列しようとしたことを示しているものと思う。谷山茂氏が、二度本に一首も含まれていなかった『玄々集』の歌八〇首が三奏本に収載されていることを指摘され、「再度本になくて三奏本に見える歌百四十八首の実に五十四％までを占め、また『玄々集』総歌数の四十七・一％を占めているのである。かくして、再度本をも却下された撰者俊頼は、卒爾の間のことでもあるので、初度本の歌を多量に復活させると共に、彼らが日ごろから関心をもっていたとおもわれる『玄々集』の歌を約半数近くまで採り入れたりして、三奏本を成立させていると考えられるのである。」（『玄々集と金葉集三奏本』国語国文・27年10月）とされたのも、撰者俊頼が何よりも撰集資料本位に『金葉集』を編纂したこと御指摘といえる。そして同一の出典歌が三集を通して隣接する個所が多いことは、撰集資料本位の編纂が『金葉集』の基本姿勢であった結果と考えられる。この撰集姿勢は『金葉集』の大きな特徴であり、撰者源俊頼の独特の姿勢であったといえよう。

三

三奏本に至り俊頼が『玄々集』を新たに撰集資料に加えたとする谷山説は、諸家も等しく認めている如く間違いないところであろう。ところで俊頼は『玄々集』の歌と詞書とをそのままの形で『金葉集』に採り入れたのではなかった。三奏本への入集歌八〇首の中、『玄々集』のままの形で三奏本に入集しているのは三五首（『玄々集』に詞書のない歌を三奏本で「題不知」とした場合も含める）、四三・八％であるに過ぎない。『玄々集』で「はじめの春」と詞書した重之の歌を俊頼は三奏本で「はつ春のこゝろをよめる」と題詠歌様式の詞書に書き改めた（『重之集』『拾遺集』の詞書は

いずれも異なる)ものが一〇首、『玄々集』で詞書を欠いた傳大納言道綱母の歌に、三奏本で「家の柳に鶯の鳴くを聞きてよめる」と詞書を加えたり、『玄々集』に「古郷をわかるゝ時」と詞書する大江正言の歌を、三奏本では更に具体的な説明を付加した「ふるさとをうらむることありてわかれけるとき、河尻の程にてよめる」にその詞書を書き改めたもの三五首が見出せる。特に道綱母歌の詞書付加は、おそらく『麗花集』中の同歌の詞書「まへなるやなぎにうぐひすのなくをきゝて」や、『傳大納言母上集』の「うぐひす柳の枝にありといふ題を」を参考にした結果であろう(『麗花集』を俊頼が直接出典としなかった点については、杉戸千洋氏の「金葉集と私撰集」——後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集・59年4月——に精緻な論証がある)。また大江正言歌についても、『拾遺集』の「帥伊周つくしへまかりけるに、河尻離れ侍りけるに詠み侍りける」にまで俊頼の目が及んでの所為であることは間違いないであろう。しかもこの正言歌は、『拾遺集』では弓削嘉言を作者としている。正言は能因の親友大江嘉言(弓削氏、長保五年大江氏に改姓)の弟で能因とも交友があった(家集)人物である。『玄々集』がこの歌を正言作としたのは何か根拠があつてのことであろうが、俊頼は、歌の詠歌事情の詮索を出典を超えて可能な限り追究の手をゆるめない。が作者については撰集資料をそのまま鵜呑みにしたのではなからうか。『金葉集』には作者に問題のある歌が二〇首近くも存在する。これは伝本による誤写ではなく、撰集の段階での作者誤認の結果生じた混乱である。初度本・三奏本の誤記をもそれとするならば問題歌は軽く倍増してしまふのである。

撰者俊頼は、何よりも一首一首の歌が詠まれた詠歌の場の詮索追究に大変執念を燃やした。勿論この執念は現代の歌へ向けられる筈はなく、例え昔の歌でも『金葉集』が多く撰集資料とした歌合・歌会歌にも必要がない。初度本四六三の貫之歌は、『貫之集』では「延喜十六年齋院御屏風のれうのうた、内裏よりおほせうけたまはりて六首……う

みのほとりにおひたる松のほとりにみちゆく人のやすみたる所」、「拾遺集」では「延喜の御時斎院の屏風四帖、宣旨によりて」と屏風歌を明示した詞書に対し、俊頼は「祝の心を讀る」と恰もこの歌が題詠であるかのように詞書を改変している。これは詠風や詠歌内容を撰者が付度し帰納した結果ではなからうか。逆に西本願寺三十六人集本や正保版歌仙家集本『中務集』に「ふぢの花をみてはるをゝしむ所」と屏風歌の詞書を持つ初度本一二九の中務歌には、「やよひのつごもりに、藤の花を見てよめる」と、実情を背景とした詠物歌としている。これも詠風や詠歌内容の付度からの帰結なのではなからうか。また「屏風の絵に、狩しにまかる人の池辺にやすむかたかけるを讀る」として、紀貫之・大中臣能宣朝臣歌を初度本で二一八・二一九と並べた場合は、『能宣集』の「かはらにまかりありくに、ふかきのゝなかに、ぬまのほどにて」（二二八歌・西本願寺三十六人集本）「たつたがはをみて」（二一九歌・同）「かりしに、のに人のありくに、ふかきの中にあるいづみのつらにて」（二二八歌・書陵部蔵三十六人集本）を屏風歌と認定している。このように俊頼は、詠歌の場の詮索追究に腐心し、場合によっては資料による事実の確認よりも、歌そのものの詠風や内容から相応の詠歌の場を付度し創作しているらしいのである。

ではあるべき詠歌の場の認定に一体何がこれ程まで俊頼の心をかき立てたのであろうか。『金葉集』撰進より一〇年程前に成立した『俊頼髓腦』によると、俊頼はしきりに実情を背景とした生活歌が今の世に至って目に見えて衰亡してしまったことを歎いていたことが知られる。「目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、猛きもののふの心をもなぐさむと、古きものにも書けれど、昔の事にや。この頃はさも見えす」と歌が変質したことを慨嘆し、「老いたる人どもの集りて、いたづらに老いぬる事を、嘆きて詠める歌なり。このごろの人は、歌までは思ひもかけず」「幼き人も稚児どもも、むかしは歌を詠みけるとみゆるためしなり」「さる折にも、昔の人は、歌を詠みければ、このごろの

人には、似ざりけるとぞみゆる」「おほかた、歌の良しといふは、心をさきとして、珍しき節をもとめ、詞をかざり詠むべきなり……これらを具したらむ歌をば、世の末には、おぼろげの人は、思ひかくべからず」と悲しんでいる。これを藤平春雄氏は、「俊頼が、和歌をすでに生活実感の表白としての抒情性を失っているものと見ていることが明瞭である」「俊頼髓脳には、和歌がもはや日常生活の次元の、抒情の具ではなく、言語表現の世界における人為的な美の創造として生きのこっている、という状況認識がはっきり認められるといつてさしかえないのである」（『新古今とその前後』笠間書院・58年1月）と鋭く論断された。傾聴すべき御高説だと思う。

俊頼は、現実生活の中で今も息づき生活感情を直接流露できるのは連歌だけだと指摘する。「連歌こそ、世の末にも、昔におとらず見ゆるものなれ」と、未だ抒情の涸渇していない生命力を認めている。この認識が『拾遺抄』にならって、連歌を『金葉集』の中に一部立として設定させたのであろう。このことは、逆に俊頼が、和歌の伝統的抒情の涸渇をいかに深く嘆き、出来ることならばその復活を希望していたかを窺わせている。『俊頼髓脳』では猥雑と見える程、和歌の故実、昔の秀歌が詠まれた場の記録、古歌詞の解説が延々と並べ立てられる。一首一首を単位とした古歌の詠歌の場の詮索と吟味、老いたる俊頼が現歌壇に和歌の伝統的抒情の復活を希望し訴嘆するこれは適切な手立であったと思われる。俊頼は『金葉集』の撰進に際しても、この古歌の詠歌の場の詮索吟味の態度を貫いていたことが既述の如く窺い知られるのである。『俊頼髓脳』に一首一首の挿話が豊富に収録されているように、『金葉集』にも小式部内侍の「大江山」の歌を始め、どの勅撰集にも見られない程数多くの挿話・歌語を持つ歌が撰び採られている。それは、『金葉集』の歌が、『俊頼髓脳』の一二首（三本のいづれかと。この外連歌一三の短連歌）と共通し、『栄華物語』一〇首・『古本説話集』六首・『大鏡』二首・『今昔物語集』四首・『袋草紙』五〇首・『今鏡』二三首・『長明無名

抄』九首・『八雲御抄』七首・『古今著聞集』四首・『沙石集』一首・『平家物語』二首がそれぞれ採り上げられていることからその一端が窺われるであろう。このように俊頼は『金葉集』の撰進に際し、終始一貫古歌に対しては詠歌の場への関心を注ぎつづけたといえる。これは彼の和歌観に深く根差した所為と言い得よう。

四

伝統的な生活感情に根差した抒情の涸渇を慨嘆した俊頼が、現代の和歌の活路として提唱した詠法は、言うまでもなく題詠である。『金葉集』でも俊頼は、歌合歌を主な対象として古い題詠歌を丹念に蒐集し現代の題詠歌を対比させ、題詠歌の淵源を探ろうとしている。これは『俊頼髓』で「おほかた、歌を詠まむには、題をよく心得べきなり」として「のちに『題の本意』に発展する、題詠と題の心との相関関係を述べた」（橋本不美男氏『日本古典文学全集歌論集』注、小学館・50年4月。本文も同じ）詠法論と呼応し、撰集の場での実践といえるであろう。この為、撰者俊頼は丹念に多くの歌合から秀歌を選び出そうとしている。それは、『後拾遺集』撰集の時点で既に行われていながら、同集が撰集の対象から洩した歌合を、延喜十三年亭子院歌合1（数字は『金葉集』の三本いずれかの入集歌数を示す）・天曆十年麗景殿女御莊子女王歌合1・応和二年河原院歌合2・天延三年堀河権中納言朝光歌合1・寛和元年内裏歌合2・花山法皇東院歌合1・寛仁末治安頃或所歌合1・某年冬権大納言師房歌合1・永承五年修理大夫俊綱歌合雜載1・永承六年春内裏歌合2・康平六年丹後守公基歌合1・承保二年内裏歌合1、と改めて丹念に俊頼が採り上げている事実にはそれは端的に表われているといえよう。

撰者俊頼が昔と今の題詠歌をその双方からこうして意欲的に蒐集した結果、『金葉集』はどの勅撰集よりも題詠歌

がその集の全歌数の中で占める比率を高くしている。この傾向が最も顕著に現われると思われる恋部を対象として、有吉保氏は一首一首を詠法によって分類され、八代集恋部全体の結果を表示された上で、「金葉集以降の各集において、歌合・歌会・定数歌の増加が顕著であり、四季歌の中で見られた現象が、恋部においても顕われている」（『新古今集の研究基盤と構成』三省堂・43年4月）と指摘される。事実有吉氏が示された表によって、氏が題詠歌と認められた歌数と恋歌全歌数との比率を私に算出すると、古今集六・〇％、後撰集〇％、拾遺集四・二％、後拾遺集六・六％、金葉集四六・四％、詞花集二七・四％、千載集四九・五％、新古今集三三・〇％となる。ここでは『金葉集』と『千載集』が共に群を抜き、撰者が大量の題詠歌を選び出している実態が具体的に判明する。島田良二氏が「後拾遺集の恋部と金葉集の恋部を比較すると、後拾遺集が日常生活における男女の恋の贈答歌を多数採歌しているのに対して、金葉集は恋の題詠歌を主体に集められている。」（『後拾遺集と金葉集の恋歌について』平安文学研究・45年11月）とされるのも、この結果からみればうなづけよう。上野理氏も同様の観点から、「詞書をもとに、歌会や歌合の歌、屏風歌や定数歌をとりだして晴の歌とし、あきらかに題詠歌とおもわれる歌もこれに加え」る分類規準で、八代集の春部・恋部を検討され、「春部では『拾遺集』と『金葉集』で、恋部では『金葉集』でパーセンテージを急激にあげる。」「『拾遺』『後拾遺』で重視された屏風歌が、『金葉』以後、定数歌にその席をゆずる。」ことを指摘しておられる（『後拾遺集前後』笠間書院・51年4月）。上野氏が作られた資料からも、『金葉集』は『千載集』と共に歌会・百首歌・題詠歌の多いことが目立っている。このように『金葉集』は『詞花集』『新古今集』以上に題詠歌を多く含んだ勅撰集となっていることが具体的に知られる。

だがしかし、俊頼は『金葉集』にただ題詠歌を殊更多く集めただけではなかった。井上宗雄氏が「金葉集は、単純

な題が『心をよめる』で、複雑な題が『ことをよめる』で、これが『法則』のようなものであったらしい。「詞書が上記のようになっていない場合、どれかの本を参照すると、大体『法則』通りになる」(再び『心を詠める』について——後拾遺・金葉集にみられる)立教大学日本文学・52年12月)と指摘されるように、俊頼は題詠歌を更に何らかの法則で分類し、それを詞書で書き分けているのである。井上氏はこの実態を「再奏本(八代集抄本による)においてはもっと多くて、百二十二首、異本に『心……』とあるものや、詞書にはないが、前の『心を……』を受けているものや、末尾の異本歌に『心……』とあるものを加えると百五十首をこえ、七百十六首の二一%強となる」「金葉集において更に注意されることは、後拾遺集で『心をよめる』と記されていた複雑な題についていえば、『ことをよめる』と記したものが頗る多いのである。尤も全部ではなく、『心をよめる』とあるものもあるが、『こと……』が(前の詞書を受けたり、異本の表記を含めたりして)約百二十首に及ぶのに対し、『心……』はほぼ二十首である」(『心を詠める』について——後拾遺・金葉集にみられる詞書の傾向——)立教大学日本文学・51年2月)と詳述される。このような詞書の書き分けは、形式的に『詞花集』に受け継がれただけで、『金葉集』で俊頼が試みた独創的企てといえる。

俊頼が『金葉集』で見せた題詠歌の処理は、「心をよめる」「ことをよめる」「をよめる」の三種の詞書に分類することであった。しかしこの分類は、諸本により書写の際かなりの混乱を生んでいる。例えば二度本(公夏本)では、複雑な題を「心をよめる」とした例が、二一・一四七・二〇四・三八二・四八三・五二七・五四一の七個所認められる。このうち、

あひてあはぬ恋の心をよめる

左兵衛督実能

527 思きやあひみしよはのうれしさに後のつらさのまさるべしとは

を除く六個所は、諸本が殆んど「ことをよめる」としているので、俊頼は本来いずれも「ことをよめる」と記したと推定できる個所となる。また、単純な題を逆に「ことをよめる」とした場合も、二五七・二七一・五一三の三個所認められるが、これも他の諸本が殆んど「心をよめる」と記しているので誤伝と思われる。五二七の「逢不逢恋」は、「堀河百首」題の一つであり、或は単純な題に準じて扱われた可能性が考えられるので、二度本（公夏本）では、井上氏の原則が貫かれているといえる。ここで注目されるのは、『金葉集』の撰集の最初の段階を示す初度本の場合である。特に為相本は鎌倉中期頃の古写本で誤写の機会は少ない伝本の筈である。この初度本では、複雑な題に「心をよめる」と記す場合が、一・二・一三五・一七〇・一七四・二三三・二六一・二七〇・二七四・二七六・二九三・三〇〇・三四三・三六七・四一六・四六五・四六九と多く目に付く。中でも巻頭の

歳中立春ころをよめる

紀貫之

1としのうちに春立つことを春日野の□なさへにも知りにけるかな

にはまず誤写はないのではなからうか。もしこの巻頭が確かに俊頼の書き記したままで誤りがないとすれば、彼は撰進の最初の段階で複雑な題にも「心をよめる」と詞書していたことになる。『貫之集』によると、この歌は奉祝のための裝飾歌であり、元来題詠歌とは無縁であった。『古今和歌六帖』では「春たつ日」の中の一首にこの歌が含まれているに過ぎないから、初度本の「歳中立春」の歌題は、撰集の際俊頼がその歌詞から帰納して設定したものに違いない。この歌が本来祝意を本旨として歌われている以上、「歳中立春」を主題とする題詠歌ほどにその題意に密着できていないのは仕方がないであろう。初度本でも、既に俊頼は、事物に特別な条件を加えたり、複数の事物を詠むべく設定された複雑な歌題に対して、題意と歌が密着している場合は「ことをよめる」との詞書を書き記している。こ

れに對し、この卷頭歌や

郭公を待つといへる心を

院御製

174 ほととぎす待つにかゝりてあかすかな藤の花とや人の見つらん

宇治前太政大臣家にて、九月十三夜翫明月といへる心をよめる

(大納言経信)

300 さむしろに衣かた敷き重ぬれど月のひかりにしくものぞなき

野草留人といへるこゝろをよめる

平忠盛朝臣

343 ゆく人を招くか野べの花すゝきこよひもこゝに旅寝せよとや

新院、北面にて藤花久匂といへるこゝろを

大夫内侍

469 ふぢ波は君が千とせの松にこそかけて久しく見るべかりけれ

など、歌の主旨が歌題以外の処にある一七四と四六九、題意の全てが歌われていない三〇〇、題意の表現が曖昧過ぎる三四三からみて歌題との密着の度合により「心をよめる」「ことをよめる」を意識的に使い分けていたものらしい。単純な一字題の場合は、歌題が庶幾した雅びな範圍の中で委曲を尽し、表象の深まりを目論むのであるから、題詠は専らその歌題の趣旨を讀むこととなる。これは前記の複雑な題に付した「心をよめる」と結局同じで、歌題である文字が表わす意味の範圍を發展させ、題意を深化させる詠風ということになる。俊賴が詞書に「心をよむ」と記したのは、同じ俊賴が記した『俊賴髓腦』に言う「まはして心を詠むべき文字、ささへてあらはに詠むべき文字」の「心を詠む」とまさに同じ表現意識によつていたと思われる。そして「ことをよめる」は、「ささへてあらはに詠」んだ題詠歌の場合であつたのではなからうか。そして俊賴自身、この判別にはかなり腐心し迷つたらしい。同一の歌に對し、撰進の初期の段階で「心をよめる」または「ことをよめる」と下した判断を途中の段階から變更していると思われる